■「大阪都市魅力創造戦略」（素案）に対する意見回答

※　類似のご意見・ご提案につきましては、まとめて公表してます。

項目	意　見　内　容	考え方
全般	●全体を通して地図等が全然なく、府民には理解しにくい。 ●「世界の都市間競争に打ち勝つ都市魅力を創造・発信」するためには、消費型の戦略だけでなく、蓄積型の戦略が不可欠。その核となるのが、美術館、博物館、資料館、図書館等の知を蓄積する拠点のあり方。作品や資料を通して、歴史を蓄積し、歴史の中で現在を批判的に検証するまなざしを持つことによって、イノベーションの力を生み出していくことが可能となる。都市文化のPDCAを動かすために、知を蓄積する拠点が必要であるということを自覚し、その蓄積が市民・府民の暮らしにつながり、市民・府民の暮らしと知の拠点が相互に支え合う関係を築けているかどうかが、世界に通用する都市であるかどうかの鍵となる。プロジェクト例とプロジェクト展開の戦略においては、そのような観点をお忘れなきように検討すべき。 ●都市魅力創造の基本方針として世界の都市間競争に打ち勝つ基盤づくりを掲げているが、これは目的ではなく、結果。 ●安全・快適なまちづくりを推進することが、都市防災機能の向上にもつながり、景観が向上することで魅力が生まれる。 ●大阪府民が豊かさを実感できるような社会環境が魅力ある都市というものであり、大阪市域外に市街地がスプロール化した状況で、高齢化・人口減少に対応するにはコンパクトでスマートな都市が求められており、世界の他の大都市と比べて公園等緑地が少ないので、みどりを実感できるよう緑視率向上・再生可能エネルギー導入推進等の取組みも推進すれば、大阪の中心である中之島・大手前地区の・歴史・文化的魅力の向上につながるのではないか。 ●目的は「府民の幸せの増大」を目的とすべき。また「府民の幸せ向上」を都市魅力創造の基本的な考え方とすべき。	都市魅力創造戦略の目的は交流人口・消費額を増加させることにより、経済の活性化や府市民のシビックプライドの醸成等を通じて世界中から人、モノ、投資等を呼び込む「強い大阪」を実現することです。また、都市魅力創造戦略は、2050年を目標とした大都市大阪の都市空間の将来像を示す「グランドデザイン・大阪」と一体的に推進していくこととしています。府民の幸せの増大・向上は、都市魅力だけではなく、行政全体の目的であり、そのことを前提に戦略の具体化を進めてまいります。 ご意見につきましては、都市魅力創造戦略の具体的な取組みを進める上で参考とさせていただきます。
大阪城・大手前・森之宮地区	●大阪城・大手前・森ノ宮地区について、日本初の観光拠点型PMOを導入しとしていますが、府民にとってはこの地域は官庁街のイメージが強いように思う。	大阪城・大手前・森之宮地区につきましては、官公庁が集積する地域であるとともに、年間約140万人の観光客が訪れる大阪城天守閣をはじめ、歴史的、文化的施設が集積している地域です。これらを活用して、世界的な観光拠点となることをめざし今後具体的な取組みを進めてまいります。

項目	意　見　内　容	考え方
「中之島ミュージアムアイランド構想」	中学校ダンス必修化にともなう、ダンス人口の増加と各種ダンスイベントの集客力に着目します。 大阪はダンスが盛んで、しかもレベルの高い地区であり、その特性を活かして、大阪をダンスのメルクマールにしたい。 3つのポイントからなる中之島ダンスシアター構想を提案します。 1 新装フェスティバルホールを最終決戦地とするダンスの全国大会（世界大会）を企画開催する。 2 ニューヨークもしくはロンドンの名門ダンス校と提携し中之島に権威あるダンスアカデミーを設立する 3 ダンス関係者のみで（ダンサー自身で）企画運営する小劇場を中之島に建設する。常になにかしらのイベントを開催することで集客力を向上させる。 以上3点の「中之島ダンスシアター構想」の実現をもって「中之島ミュージアムアイランド構想」に寄与します。現在若者が踊る優美なジャズダンスは、「水と光」の演出にもよく映える。他県、他市に先んじられれば、効果が薄れる。	大阪の高校が全国大会で優勝するなど、ダンスは大阪の大きな都市魅力の一つとなっています。ご意見につきましては、今後の参考とさせていただきます。
中之島図書館	●図書館は利用者から便利な場所にあるべきであり、さらに、それが市民の利用する公園や緑地にあれば、最適で、中之島図書館は図書館までのアプローチとその周辺の環境からして、必要十分な条件を備えている。東大阪市内に位置する府立中央図書館は、大阪市内から地下鉄を利用して、来館するまでに往復千円近くの運賃が必要となり、決して良い場所にあるとは言えない。橋下大阪市長の廃止、転用発言は府市統合あってのものであろうが、市立中央図書館も地下鉄の駅からは最短の距離にあるとはいえ、府市の中心部にあるとはいえない。 ●美術館への転用については、中之島図書館は美術館としての転用に適切な建物ではない。大阪市の購入した近代美術絵画は天王寺美術館を増築、収蔵されることが最良と思う。百年以上の積重ねのある中之島図書館を廃止、美術館に転用することは熟考された案とは言い難く、再考をお願いしたい。 ●中之島図書館は重要文化財としての建物の素晴らしさと、先駆的な図書館としての歴史や伝統の両方が合わさって来たからこそ、利用者だけでなく観光客にも人気のある施設となっており、元来図書館として、設計・建築されたものを、美術館に転用するのは無理ではないか。展示品を日光から遮るためには、窓を完全に密閉しなければならず、建物の魅力は半減する。また、観客の動線を考えたとき、エレベーターがない（重要文化財のため設置できるかも含め）などの問題がある。何より、展示品をどこから搬入するのか、どう運ぶのか、現在の書庫の構造（高さ、通路の狭さ、段差の多さ）だけでなく、美術館で最も難しい温度・湿度管理ができるのか、課題が多すぎる。 ●中之島図書館を美術館に転用する案は、今でも数少ない図書館を減らすことになり、生涯学習およびビジネス支援の面からも甚大な損失を被る。さらに、美術館転用に掛かる費用は税金の無駄遣いとなる可能性が高い。改修しても満足できるような美術館になるとは思えない。府民の誇りを傷つける結果に終わるだけではないか。よって、廃止・転用案は慎重に再考をお願いしたい。 ●中之島図書館は1904年建設の重要文化財として100年の歴史をきざみ、大阪の文化を支えてきた。リニューアールされ、魅力を増した東京駅の例をあげるまでもなく、古い建築物は都市の魅力を高める。大阪の歴史を語る貴重な資料がその中で守られ、使い続けてこられたからこそ、その建物の価値は活かされている。耐震工事等を施しながら、入口や閲覧室の改善、エレベーター設置等により使いやすい構造をくふうして欲しい。 ●先人の努力の積み重ねの上に私達の現在の文化があり、歴史を知る喜びも人々は知っている。先人のさまざまな記録が中之島図書館の中に凝縮されている。図書館はその資料の魅力を多くの人に知ってもらう努力をより積極的にして欲しい。 ●中之島図書館は大阪ビジネス街の中心にある。多くのビジネスマンがここの資料とデータベースを活用している。公共図書館は誰もが無料で使えることで大阪人の情報能力を高めている。大阪府・大阪市の行政マンがインターネットだけでなく、しっかり図書館資料を活用し、情報能力を発揮されることを願う。 ●大阪府立中央図書館の資料を取り寄せ、返却できることが大変便利である。誰もが利用しやすい知のオアシスだ。年間31万人の入館者が物語っている。 ●なにより大阪人に長く愛され、中之島図書館は大阪の誇りだという全国からの声に耳を傾けて欲しい。これは単なるノスタルジーではない。誰もが学ぶことを大切にした明治・大正時代に、大阪人に素晴らしい学ぶ館を用意してくれた第十五代住友吉左衛門への感謝の気持ちを今一度思い出したい。	中之島図書館の建物や図書については、寄贈してくださった方の意思をしっかり受け止め、適切に管理していきます。現在、中之島図書館については、都市魅力の向上に資するという観点から、専門家の意見を聴きながら、そのあり方を検討しているところです。いただいたご意見については、今後の参考とさせていただきます。

項目	意　見　内　容	考え方
天王寺・阿倍野地区	●「天王寺・阿倍野地区」について、「動物園を核としたエリア形成」とされているが、大阪市立美術館も核としたエリアとすべき。そのため、現在凍結されている大阪市立近代美術館(仮称)を、大阪市立美術館の分館、別館として市立美術館近隣の天王寺公園内に建設し、市立美術館との複合施設とすればいかがか。両館が合併すれば、国内有数規模の美術館となり、国立博物館・美術館に匹敵し、相乗効果により、おそらく年間100万人規模の来場者を期待できる。 ●さらに、あべのハルカス美術館[仮称]も2014年に開館予定のため、三施設が協同することによって、より一層の観光的魅力を形成できる。 ●現在、大阪市立近代美術館(仮称)の建設予定地とされている中之島地区は、防災上、貴重な文化財や美術品を擁する博物館・美術館建設にはまったく不適。 ●現在の阪堺線は堺筋の西側で新世界の北西に位置する場所に恵美須町、南西に南霞町駅があるが、阪堺線からは新世界はほぼ見えない。2015年までに阪堺線の恵美須町駅から今船駅までを堺筋に移設してほしい。開園100周年の天王寺動物園に直結する公園前本通商店街のあたりに中間駅を新設してほしい。 ●あいりん地区は、バックパッカーと呼ばれる外国人観光客の多い場所になっているが、治安が悪い。阪堺線を堺筋に移して、堺筋の駅全てに観光案内所をかねる交番を配置すればよい。阪堺電車の延長するかたちで天王寺と難波を結ぶLRTができます。LRTは乗車賃も安く、乗り降りも簡単であるため、これを使って犯罪関係者が自由に行き来する町にはなってほしくない。 ●あべのハルカスのグランドオープンを控え、風景となる寺町の鎮守の森を活用すべき。生國魂神社周辺のホテル街がそれを阻害しているため、これらのホテル街を潰して、お祭りなどの寺社の行事に協力的な和風建築の施設をつくる都市計画のようなものはできないか。生玉のほうには石山本願寺を再建したりすると面白い。宗教施設というよりは観光施設として、中は大阪観光局になっていてもいいので、それ自体が場所にあっているものなら商業施設でも公共施設でも旅館でも構わない。 ●寺社の行事の際、期間は寺町全体を提灯や行燈で照らしたりするなど、寺町で寺社の行事を一緒に行うことにより、あべのハルカスからの眺めもすばらしいものになる。	天王寺阿倍野地区につきましては、上町台地や新世界など個性的な周辺エリアの特性を活かし、動植物公園を核としたエリア全体の集客力を強化したいと考えています。公園内についても動物園はもちろんのこと、映像館や植物温室の活用、茶臼山や慶沢園などでの歴史・文化の体験、四季を通じたイベントの開催などエンターテイメント溢れる公園にしてまいりたいと考えています。ご意見につきましては、天王寺・阿倍野地区の魅力向上に向けた検討を進める上で参考とさせていただきます。 また「グランドデザイン・大阪」ではなんばと天王寺阿倍野地区の一体化を図るため次世代の軌道系交通システムであるLRTで両地区をつなぐ案を例示しています。都市魅力創造戦略は「グランドデザイン・大阪」と連携し一体的に推進していくこととしており、ご意見につきましては、今後の参考とさせていただきます。

項目	意　見　内　容	考え方
御堂筋フェスティバルモール化	●”生きた「建築ミュージアム」の実現”の候補として、御堂筋南端の、「南海ビル」と「旧精華小学校校舎」を是非加えていただきたい。 ●地下街が大阪の都市魅力創造の重要な基盤である。地震や津波などの大災害を除いて、安全安心な場所であるが、全体では一体感が無くぼやけた存在となっているため、梅田や難波の地下街全体を正式名称として、それぞれ「大阪キタの梅田地下街」「大阪ミナミの難波地下街」にできないか。地下街全体の地図や案内表示があれば非常に便利。今よりはるかに大きく外国語も記されたものを壁や柱に設置し、床には東西南北の方位がわかるものがあれば大阪らしい。 ●御堂筋なんばエリアには、キタ(梅田)エリアにはない、『古き良き大阪』を体感できるエリア作りが出来るはずである。また、3つの重点取組である、大阪アーツカウンシル(仮称)や大阪観光局(仮称)を大阪ミナミの玄関口であり、昔からの文化発信地なんばの「もと精華小学校・幼稚園校舎」に設置することにより、観光・文化・芸術を融合させて街を活性化することができる。こういった施設を新たに造るよりも既存建物を耐震補強することは、コスト面でも有利で、何よりも現代では造ることが出来ない建造物を体感することできる。 ●ミナミエリアを重点エリアに位置づけていないのは、ここでいう重点エリアが、今後、民間で積極的に活かしていく公的施設や用地等を行政計画上位置づけて道筋をつけていく意図であるからか？ ●整備済みでかつ民間が運営している「とんぼりリバーウォーク」については、規制緩和やまちづくり、行政・地域・事業者による推進体制など、活用にむけた体制の再構築など、一層の取組みが必要と考えられ、この点については橋下市長におかれても「御堂筋に匹敵するくらいの宝」「体制づくり」の指摘があり、さらに、とんぼりリバーウォークの活用は、道頓堀川と共に形成され空洞化が指摘される道頓堀～宗右衛門町へと波及する視点で、一体に都市魅力エリアとして再生する必要がある。都市魅力戦略計画上、その道筋をつける何らかの位置づけがなされる可能性はないのか？ ●「なんば駅前の歩行者空洞化」については「御堂筋フェスティバルモール化」に含まれるのか？また、「道頓堀プール」の取組みについては、「道頓堀川開削400周年」に含まれるのか？ ●対外的に本計画をみたときに、キタやミナミ、USJほか主要な都市魅力資源が戦略上対象外であるかのように誤解を招かないように配慮をお願いしたい。	御堂筋及びその周辺エリアでは、公的歴史的資産の活用の動きとあわせ、近代建築をはじめとする民間歴史的建築物の再生・活用をすることにより、‘生きた「建築ミュージアム」’を実現し、その魅力を発信していきたいと考えています。 ミナミエリアにつきましては、なんば駅前も含めて御堂筋フェスティバルモール化において重点エリアに位置付けています。また水と光のまちづくりの推進において道頓堀を含めた水の回廊を中心として新たな推進体制を構築し大阪の主要集客拠点と水の回廊をつなぎ、都市の魅力を強化してまいりたいと考えております。 また2015年には、大阪城まちづくり400年、道頓堀川開削400周年、天王寺動物園100周年などを迎えることから、同年をシンボルイヤーと位置付け、民間の主体的な取組みが展開されるよう、府市は機運の醸成をはじめ、場の提供や規制緩和等で最大限サポートしてまいりたいと考えております。 ご意見につきましては、今後の参考とさせていただきます。 なお、旧精華小学校跡地につきましては、売却が決定しており、現在プロポーザル方式により事業者を募集しています。価格のみでなく、なんばエリア全体の活性化への強い意欲や熱意を持つ事業者に跡地活用を委ねることを目的としています。
築港・ベイエリア地区	●築港・ベイエリア地区のクルーズ客船の母港化を掲げているが、その可能性は不透明ではないか。 ●過去に行われた大阪の港に世界各国から帆船が集まる国際的な大イベントを実施すべき。より国家的なイベントを大阪で開催することができれば、世界に対し大阪の港をアピールすることができ、将来的にクルーズ客船や観光客を世界中から集めることにプラスになるのではないかと思う。	クルーズ客船については、中国の経済発展と相俟ってアジア域内のクルーズ需要が高まり、欧米系のクルーズ船社が参入しており、今後も欧米系及び中国のクルーズ船社が参入を表明しています。 各船社は日本での拠点港(母港)を調査しており、ここ数年で決定される見込みです。 また、中国ではクルーズ人口が急速に増加し、現在80万人に達し、10年後の2022年には156万人に成長すると予測されています。 日本におけるクルーズ人口は、現在約20万人ですが、10年後には128万人に成長すると予測されています。 この様に、クルーズ船社のニーズや、クルーズ人口の増加から、大阪港におけるクルーズ客船の母港化は可能と判断しています。 ご意見につきましては、今後の参考とさせていただきます。

項目	意　見　内　容	考え方
大阪ミュージアム構想の推進	渡辺邸を文化財に再指定し、大阪ミュージアムにも登録してほしい。大阪になんの関係もないと思っていた人に気づいてもらえるようにあえて渡辺だけをとりあげたCMなどの情報発信もお願いしたい。	ご意見につきましては、今後の参考とさせていただきます。
天満・天神橋地域の魅力発信	●主要プロジェクト例にある「大阪くらしの今昔館」については「大阪天満宮や天神祭など豊富な地域資源を生かしたイベントを実施する」とされ、地域に立脚したミュージアムを想定しているが、今昔館のミッションはそれだけではなく、ここでの研究・活動や展示は大阪の近代史を掘り下げ、大阪における建築文化・文化的基盤を物語るものであり、個別の集客即効効果のみに注目しないでいただきたい。 大きな組織でくくって、個別の活動をコントロールしようとするよりも、自発的な努力で継続してきている活動を大切にし、それを大阪の看板とすべく後方支援する市政であってほしい。 ●大阪くらしの今昔館の存在意義は、「天満・天神橋地域の特性」を生かした「観光客の誘致」が最大の目的ではなく、大阪の人々の今昔の暮らしの様相を広く今に残すための大切な史料であって、「天満・天神橋の魅力を発信するための施設」ではない。天満・天神橋に限定せずとも、日本の暮らしの魅力を伝える場所・建築・生活の研究をする場所として充分存在価値がある。 ●大阪くらしの今昔館は、数百年の昔から魅力ある都市居住を実現してきた大阪というまちを紹介する、小規模ながらきわめて良質な文化・教育施設であり、派手なPRもなく大規模な企画展も来ないが、口コミでその良さが広がり、入場者が年々増加しているという。大阪のまちの魅力を発信する重要な施設であり、行政はもっと資金や人材をつぎ込んで、大阪文化などの調査・研究を進め、学術的に裏付けされた「ほんまもん」の集客施設として、さらに魅力あるものにしていくべきだと考える。 ●12頁＜地域資源を生かした大阪の魅力発信＞のうち、「石畳と淡い街灯まちづくり」に挙げられた6地区は、いずれも大阪の中心地から遠く、外国や大阪府以外からの観光客を呼ぶのはむずかしい。それに対して「天満・天神橋地域」は梅田から近いので、重点的に観光客対策をするべきだと思う。中でも今昔館は大阪市内に現存しない「歴史的な町並み」（江戸時代の浪花）を再現している点で魅力的である。関西ではここだけの特色であり、いつ行っても外国人観光客の姿が絶えない。 ●今昔館については、「市政改革プラン」「アクションプラン編別冊」に、「指定管理期間終了までに持続可能なスキームを構築できないときは、より展示を生かす観点から他の博物館との統合、または廃止」とあるが、たとえば大阪歴史博物館のように、実物大模型があってもそれを生かし切れていない現状をみると、今昔館を他館の学芸員と統合するのは反対である。実物大の町並みでは、祭り・縁日・町家寄席・茶会などを催し、多くのリピーターを獲得し、町並みにいきいきとした賑わいを作りだしている。これは10年間の試行錯誤を蓄積してたどりついた成果であり、現在のボランティアや学芸員なくしては実現できないものである。 ●今昔館は工夫された企画展示を行っている。重要文化財を含む多くの歴史資料を保管しており、博物館として高いレベルを保っている。建築や生活文化に特化した博物館は全国でも珍しく、上方文化の研究拠点としてもっと多くの人材や資金を投入すべきであり、廃止すべきではない。＜素案＞では「地域と連携し、大阪天満宮や天神祭など豊富な地域資源を生かしたイベントを実施」するとあるが、今昔館はまず全国レベルの博物館としての役割を果たし、その上で地域の連携を考えるべきであろう。 ●住まいのミュージアムが地域の魅力を発信していくことには賛成。ただし、ミュージアムの学芸員がイベント屋になってしまわないかなと気になる。住まいのミュージアムの常設展示が学術的な裏づけをもとにつくられているように、学芸員には地域の魅力を発信するうえで学術的な視点を欠かさぬよう、調査・研究にも力が入れられる環境を確保してほしい。	大阪くらしの今昔館は、大阪の住文化に関する資料の収集、保管、展示及び研究などを通じ、市民の住生活の向上や市民の文化の向上等に寄与することを目的とした施設です。 単に「見る」だけでなく学術的な裏付けのもと再現された江戸時代のまちなみを「体感できる」展示としており、お茶会・落語会といった様々な催しや、大阪の都市居住文化・暮らしなどに焦点をあてた多彩なテーマで企画展を開催しております。また、ボランティアによる町案内や大道芸実演など、館の活動に多くの協力をいただいております。さらに、小学生の体験学習など生涯学習施設としての役割も果たしています。 昨年度は国内外から約20万5千名にご来館いただいており、近年では、日本の生活文化を体験できることから多くの外国人観光客も訪れております。 今後は、引き続き住文化の展示・研究等の機能の充実を図りつつ、さらに都市魅力創造の視点から、天満・天神橋地域と連携し、地域資源を生かしたイベントを実施することにより、国内外の多くの方々に大阪の住文化の魅力を広く発信してまいりたいと考えております。 ご意見につきましては、今後の参考とさせていただきます。